

兵助は、あの靴がいつまでもかあいがられてくれればよい、とおもいました。



dai

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

あらすじと解説

靴屋の小僧の兵助は、初めて作った靴が売れ、嬉しくてたまらない。買ってくれた旅人に靴墨とブラシを渡し、かわいがってくれと頼む。その後も何度も追いかけては、抜けた時のためにと釘を渡したり、「大事にはいてやってください」と頼んだり…。しまいには旅人から怒られてしまう。丹精込めた作品を愛してほしいと思う気持ちちは、作家としての南吉の願いそのもの

だろう。作品は発表した時から作者の手を離れる。どこかの町で見知らぬ誰かに読まれるのを想像するのは楽しいことだ。それは靴も童話も絵も同じこと。この絵を見ていただきたい。同じクリエイターとしての共感が兵助の姿によく現れているではないか。

▶▶ 新美南吉記念館学芸員 遠山光嗣

絵

dai

イラストレーター 子どもや動物達をモチーフに少し不思議であたたかい世界を描いています。兵庫県在住。
<http://www.geocities.jp/linemaker8161/>

●絵について 靴が完成した夜、嬉しさのあまりそのまま眠ってしまった兵助を想像しました。大切な靴、かわいがってもらえるといいね。